

国語

次の文章は、那須正幹『ぼくらは海へ』（文春文庫）の一節である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

「そろそろ帆をはってみようか。」

勇が、いくぶんきんちようした顔つきでいった。誠史は、うなずいてさおをひきあげる。そして、マストから㊦タレさがっている二本のロープを勇といっしょにぎって、ゆっくりとひきはじめた。帆げたがゆれながらあがりはじめ、それにつれて帆げたの下にうずくまっていたキャンバスシートが、むくむくとおきあがり、マストをはいのぼりはじめた。

一メートル、二メートル。帆がひろがるにつれ、へさきや、前方の㊧ケシキは、すべてシートにさえぎられてしま

う。
いまや帆は、完全にはられ、沖からふいてくる風に、ガサガサとはでな音をたてはじめた。勇と誠史はふたりして、ロープをマストの根もとのつかえ棒にむすぶと、いかだの最後尾にいて、帆のはりぐあいをたしかめた。

「すげえや……」

勇が、感嘆の声をあげた。

雅彰も、見ているだろうか。誠史は岸のほうをふりかえろうとした。

そのときだった。沖のほうから、さっとふきわたってきた風が海面をひとなでした。

いまだでガサガサと鳴っていた帆が、ぱつとまるくふくらみ、いかだがきゆうに走りだした。誠史も勇も、かんぱんの上でよろめくほどの㊨イキオいだ。

思わずしゃがみこむふたりの目に、帆布の下すきまから、海中へずぶずぶとしずんでいくへさきが見えた。いったんしずみこんだへさきは、㊩フイにうきあがり、ふたたびしずむ。

まるで【一】ように、いかだはまえのめりにつっこんではうき、ういてはつつこむ動作をくりかえし、やがて、かんぱんが大きくかたむくほど、へさきをしずめたかと思うと、つぎのしゅんかん、ぐるりと反転してむきをかえしてしまった。

いまだでまるくふくらんでいた帆がたちまちしぼみ、だらりとたれさがった。風はいぜんとしてふいているのだが、帆げたが風と平行になったので、風をはらまなくなったのだ。

いったいなにがおこったのか。

誠史も勇も、ぼんやりと空色の帆を見つめた。

「どうなってるんだ？」

勇が、やっと立ちあがった。前かんぱんにいた嗣郎が、帆の下をくぐってふたりのところにやってきた。

「ああ、びつくりしたあ。」

嗣郎が、ほっとしたようにわらった。

「風がふいたなって思ったら、きゆうにへさきがしずむんだもの。ちんぼつするのかと思った。」

「なんか、こう、船がしやつくりしてるみたいだったなあ。」

勇が、そういつてわらった。誠史もなんとなくおかしくなつてわらった。

「やっぱり、こいつのせいかなあ。」

ひとしきりわらったあとで勇が、よこ風をうけてのんびりばたっている帆を見あげる。

「もういっぺん、ためしてみようか。」

誠史がいうと、勇がいいだろうといつてうなずいた。こんどは嗣郎も後かんぱんにいることにした。誠史が竹ざおをつかっていかだを風下にむける。いまだでだらしなくたれていたシートが、たちまちまるくふくれあがる。

①誠史は、身がまえた。船がいつしゅん風下にむかつてつつ走るかに見えた。と思う間もなくがくとブレーキがかかる。へさきが海中にもぐったのだ。もぐったへさきは、二、三ど大きくしゃくりあげるように上下して、さつき

と同様右にむかって反転したかと思うと、びたりとうごきをとめた。

いかだの④イジョウなうごきが、帆によることは⑤ウタガいなしだった。ただ、どうすればそれがなおるのか、三人にはまるで⑥ケントウもつかなかった。

「このままじゃあ、どうしようもないな。とにかく陸にあがってかんがえようや。」

勇がため息をつきながら帰港を命令する。

シーホース三世号は、とりつけたばかりの帆をおろし、竹ざおの力をかりて、すぐごと母港にもどるほかなかった。

岸べきに立っている雅彰だけが、うれしそうに三人をむかえる。

「かっこいいなあ。とおくから見たら、本物の船みたいだったよ。」

「かっこいいことあるもんか。しゃつくりばかりするんだぜ。もうすこしで三人とも海におちるところさ。」

誠史のことばをきくと、雅彰はたちまちA顔をくもらせた。

「ふうん……。やっぱり、ぼく、のらなくてよかった。」

②いったいなぜ、帆をはるとしゃつくりをはじめのか。勇は、いらいらしながらかんがえていた。あしたは育英塾の組がテストだった。このテストで夏期講座のクラスわけがきまる。

すこしはテストに⑦ソナえて勉強しといたほうがいいと、勇もかんがえている。でも、いかだのことを思うと、とても勉強どころじゃなかった。

船がまえにつんのめるということは、帆の大きさに関係があるのかもしれない。風の力がつよすぎて、いかだが前傾してしまうのだ。もうすこし帆を小さくすれば、船がスムーズに前進するような気がする。

だが、それだけでいいだろうか。

勇は、いままでテレビや本で見た船の形を思いだしてみた。

そういえば船というものは、みんなへさきのほうが高くなっている。ひよつとすると、あれがへさきをしずませない工夫かもしれない。

「そうか、へさきに波よけをつけたら……」

勇は、いそいで雑記帳の上にかだの側面図をかいてみた。へさきの側面を幅広の板で⑧カコつてみてはどうだろう。こうすればへさきにあたる波は左右にかきわけられて、海中につっこむこともなくなるのではないだろうか。

玄関のドアのあく音がして、父さんの声がきこえた。父さんがかえってきたらしい。やがて勇をよぶ母さんの声がした。

ダイニングキッチンにいくと、なんにもないテーブルのまわりに⑨セビロすがたの父さんをはさんで、母さんと姉さんが腰かけていた。

「なんだよ、ごはんじゃないの。ぼく、あしたテストだからね。ごはんになってからよんでよ。」

勇は、いったんはいりかけたダイニングキッチンから出ようとした。

「さてよ、勇……」

父さんがよびとめた。

「そうよ、テストだったら、もううけなくていいのよ。」

母さんの声で、勇はうしろをふりかえる。

「また転勤なんだって。七月のおわりに引っこすのよ。」

姉さんが、そっけなくいった。

帆をおろしたシーホース三世号が敷き石の沖にうかんでいる。マストのさが、ゆつくりと波にゆれている。

「ふうん、引っこしちゃうの。」

嗣郎が、つぶやくようにいった。

「ああ、七月のおわりだってさ。」

勇は石をひろって、海の上にむくむくと立ちあがっている入道雲めがけて力いっぱい投げた。石は、雲のなかへすいこまれたかと思うくらい高くあがり、それから、力つきたように海中におちた。

まだ、誠史や雅彰はきていなかった。邦俊がシーホース三世号のかんばんに立って、マストや帆をながめている。「せめて、あいつがまともに走るのを見てから、バイバイしたかったな。」

勇が力なくいった。

「できるよ。勇くんのいった波よけなら、すぐつくじやない。帆の大きさだって調節できるもの。」

「さあな、それくらいでしゃっくりがとまってくれりやあいいけど。」

邦俊が岸にあがってきた。③そのとたん、勇はがらりと明るい声で邦俊によびかける。

「どうだ、ちよつとしたもんだろ。」

「うん、よくできてる。」

「そりやそうさ。日曜日から毎日かよつてきてつくつたんだぜ。」

邦俊が勇とならんで防波堤に腰かけた。

「こんどは、どこにいくの？」

「東京——」

「へえ、きみの父さん、出世したんだな。」

邦俊は、それっきりだまっていかだをながめはじめた。

背後で自転車の音がした。誠史と雅彰が空き地をよぎって防波堤のそばに自転車をのりつけてきた。

「勇くん、転勤だつて。」

嗣郎がどなる。ふたりがあわてたように自転車からおりた。

「ほんとか？」

誠史が勇の顔をのぞきこんだ。

「ほんとさ。七月のおわりまでに、いかないといけないんだつてさ。」

「ちつとも知らなかったな。はやく話してくれりやいいのに。」

雅彰がいくぶんB口をとがらせる。

「おれだつて、きのうきいたばかりなんだ。うちの銀行つて、いつもこれなんだぜ。ちつたあ家族のこともかんがえてくれりやあいいのに。」

「あと二週間ないじやないか。」

誠史がいかだのほうに目をやった。

「それまでに、しゃっくりなおして航海に出ようや。」

④「あのね、勇くんがしゃっくりをなおす工夫かんがえてるんだつて。」

いきこんでしゃべりだす嗣郎のことばを、勇がさえぎった。

「わかるもんか、うまくいくかどうか。それより、きょうはテストなんだろ。はやくいったほうがいいよ。」

「勇はいかないのか。」

「おれはもういかないよ。どうせ夏期講座に出られないもの。」

「そうか、そうだな。」

誠史はうなずいた。ふいに勇は防波堤の上から敷き石の上にとびおりと、いかだのほうに歩いていく。そのうしろすがたが、やはり⑤いつもの勇とはちがつて、なんとなくさみしそうだ。

「勇くんが、いちばんハッスルしてたのにねえ。」

雅彰がしんみりした調子でいった。

「転勤じゃあしょうがないよ。しかたないなあ。」

誠史のことばに、雅彰もまるい顔をうなずかせた。

「転勤じゃあ、しょうがない……か。そうだな。しょうがないよな。」

誠史の声を背後で聞きながら、勇はひとりでうなずいた。

いままでなんど転勤したことだろう。いや、これからだつて、引っこしをくりかえすことになるだろう。父さんが銀行をやめないかぎり。勇が父さんのもとをはなれないかぎり。

一年生のころ、先生からどこで生まれたかたずねられたことがある。勇は自分の生まれた産婦人科の病院の名をいった。

「そうじゃなくて、あなたの生まれた町の名まえ……」

先生がわらいながら、またきいた。勇は首をふった。病院の名まえはおぼえていたけれど、どこにあったかはわすれてしまっていた。

「たいせつなことなのよ。その病院のあったところが、あなたの生まれ故郷なんだから。」

お母さんにきいていらつしやいと、こんどは真顔で先生がいった。

さすがに母さんは、ちゃんとおぼえていた。

「大阪よ。あのころ大阪の千里ニュータウンに住んでいたの。勇ちゃんに話さなかったかしら。」

「じゃあ、ぼくの生まれ故郷って、大阪？」

母さんは首をかしげた。

「さあ、生まれ故郷って、いうのかしらね。だって、あそこは一年もいなかったのよ。あなたが生まれて二か月めには九州に引っこしたもののね。」

あれ以来、勇の頭に生まれ故郷ということばがみようにひっかかってしまった。

そういうえば、勇に質問した先生の名は、たしか今中先生だったな。いや、今中先生は山口市の桃山小学校の先生だ。

一年生のときは博多だったから……。ええと……。

勇はこんがらがった記憶の糸をほどくのをやめて空を見あげた。⑥入道雲がおおいかぶさるように中天高くわきあがっている。

友だちもたくさんいた。引っこしがかさなると引っこしじょうずになる。引っこしたさきの学校で、すぐに友だちをつくるのがうまくなった。でも、その友だちも、つぎの町に引っこしたとたんわすれてしまう。いや、わすれるから、⑦新しい友だちがはやくできるのかもしれない。

ふいに勇は、なにもかもがむなしい気がした。友だちも学校も、自分が生きていることさえなんともつまらなく思える。

⑧「ねえ、波よけ板、こんなものでいいかな。」

えんりよがちな声がした。ふりかえると防波堤の上に、嗣郎がひとり、板ぎれをかかえて立っていた。誠史たちは塾へ出かけたらしい。

嗣郎を見たとき、勇の心を占領していたじめついた気分は、さっぱりときえさり、勇は、いつもの陽気な子どもにもどっていた。

「ああ、いいぞ。ようし、ここにいろあいだに、ぜったいこいつで航海に出てやるからなあ。」

勇は、快活にこたえと岸にかけあがった。

問1 — ㊦㊧について、カタカナを漢字に直しなさい。

問2 「」に入ることばとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア おじぎでもする
イ おぼれてでもいる
ウ おしゃべりでもする
エ おくりだしてでもいる
オ おいかけられてでもいる

問3 〓 A「顔をくもらせた」、〓 B「口をとがらせる」について、この時の気持ちを表したことばとして最も適切なものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア 不安 イ 不快 ウ 不幸 エ 不満 オ 不明
カ 不可能 キ 不機嫌 ク 不気味 ケ 不思議 コ 不愉快

問4 ①「誠史は、身がまえた」について、この時の誠史の気持ちとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 船が今度はどう動き出すかわからないと思い、注意している。
イ 船が今度こそ沈まらずうまく進むだろうと思い、期待している。
ウ 船が今度こそ海に沈んでしまうと思い、不安を感じている。
エ 船がまた同じように沈みかかっていると思い、用心している。
オ 船がまた沈みかけるのにそなえようと思い、張り切っている。

問5 ②「いったいなぜ、帆をはるとしゃつくりをはじめのか」について、勇の考える「しゃつくり」の原因と対策を八十字程度で説明しなさい。

問6 ③「そのとたん、勇はがらりと明るい声で邦俊によびかける」について、勇がこのようにふるまったのはなぜか、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 船の今後について楽観的に考える嗣郎を見習い、前向きに考えようと思ったから。
イ 話のわからない嗣郎にがっかりし、邦俊と話すことで元気をもらおうと思ったから。
ウ 嗣郎の話から波よけをつくれれば何とかかなりそうな気がしてきて、元気が出てきたから。
エ 見物に来た邦俊には、船や自分が不安を抱えていることなど気づかletくなかったから。
オ 自分をはげます嗣郎の前で邦俊に明るく接することで、嗣郎の気持ちに応えたかったから。

問7 ④「あのね、勇くんがしゃつくりをなおす工夫かんがえてるんだって。」について、このことばをさえぎった時の勇の気持ちを説明しなさい。

問8 ⑤「いつもの勇」について、「いつもの勇」の様子を六十字以内で説明しなさい。

問9 ⑥「入道雲がおおいかぶさるように中天高くわきあがっている」について、この風景には勇のどのような気持ちが反映されているか、説明しなさい。

問10 ⑧「ねえ、波よけ板、こんなものでいいかな。」について、勇はこのことばをどのような思いで受け止めたのか、説明しなさい。

問11 ⑦「新しい友だち」について、あなたに「新しい友だち」ができた時のことを具体的に教えて下さい。

(2017年度)

国語 解答用紙 その1

受験番号
氏名

10	9	8			7	6	5				4	3	2	1			
												A		カ	ア		

国語 解答用紙 その2

氏名